

日本の高等教育の パラダイム変換を推進する 新センターが誕生！

5月27日(火)に開所式が開催された「森有礼高等教育国際流動化センター」。
実は、日本の大学教育に一石を投ずる画期的な出来事だったので。教育・学生担当の落合副学長に詳しくお話をうかがいました。

大学連携にはチューニングが不可欠

環境問題、人口問題、食料問題……グローバル社会は「グランド・チャレンジ」と呼ばれる多くの課題を抱えています。これらの課題の解決には、幅広い視野と深い洞察力を兼ね備え、グローバルに活躍できるイノベティブな人材が不可欠です。

一橋大学は、こうした人材の育成に努めており、そのために本学教育と国内外の教育リソースを連携させようとしています。それは、世界の優れた大学との学生交流を強化して学生の国際流動性を高め、共同学位課程等を整えて一橋教育の国際通用性を向上させたいという思いからです。その実現に向けた研究と実践を行う組織として、このたび「森有礼高等教育国際流動化センター」が創設されました。

音楽で音合わせが重要なように、大学間の教育連携にはチューニングが欠かせません。チューニングと

は、大学間で教育環境や科目の内容、評価方法、学修支援体制、得られる能力等について共通の認識を持ち、互換性を認め合うための作業のこと。

その目的は、

- ① 課程教育の説明責任の強化
- ② 学生の流動化や学修機会の多様化の促進
- ③ 前二項の達成に向けた、各大学における教育の独自性・特色の追求

——にあります。

チューニングの概念は、ヨーロッパで生まれました。EUが結成されたとはいえ、かつては大学教育制度が国ごとにバラバラでした。相互参照性が低かったため、自分の所属する大学や国の外で学ぶことが難しかったのです。それを脱し、高等教育システムの互換性を高め、欧州各国を行き来して学ぶ新しい「ヨーロッパ人」を育成しようと、1999年に高等教育改革計画「ボローニャ・プロセス」が採択されました。こうして、2000年に大学主体の事業として「Tuning Educational



理事・副学長(教育・学生担当)
落合一泰



記念講演を行うオランダ・フローニンゲン大学 ローベルト・ワーヘナル教授・人文学部部長



右から、森有一氏、豊岡宏規氏、山内学長、落合副学長による除幕式



祝辞を述べる文部科学省高等教育局国立大学法人支援課長 豊岡宏規氏





Structures in Europe」が創始されたのです。

それが世界各地に広がり、チューニングは世界で競争する優れた大学が協力して国際性や多様性のある人材を育成しようという普遍的な試みとなりました。

ス。パソコンに対抗するには？

チューニングとは、端的に言えば大学間のヨコのつながりを強化することです。互いのプログラムをすり合わせることでレベルの高さが揃い国際通用性が高まります。教育の質が保証され、互いに認め合うことで学生や研究者の国際流動性が高まります。

1台1台に制約のあるパソコンでも、世界中のパソコンを連結すれば、高性能のスーパーコンピュータに匹敵する力を持ち得ます。同様にチューニングにより複数の優れた大学が連携することで、世界ランキングで常時上位を誇るような大学に勝るとも劣らない教育を行うことが可能になり、優れた人材を育成できるようになります。学生にとつては、自分が魅力を感じる複数の大学で国籍を問わずにレベルの高い教育を受けることができるようになるのです。

チューニングでは、「コンピテンス (competence)」に関する認識を大学間で共有することを重視します。コンピテンスとは、ひとつの課程を履修した学生が修了時に身につけているべき能力のことです。リーグを組む同レベルの大学が課程ごとにコンピテンス目標を共有し、その達成に向けてカリキュラムを調整することがチューニングなのです。

一橋大学は伝統的に少人数ゼミによる能動的学習を行っています。チューニングによって調整するのはカリキュラムであって、こうした大学の独自性や魅力を活かしていくことが重要になります。そうした教育的特色を各大学が発揮しなければ、学生はわざわざほかの大学に向いて学ぶ必要を感じないことでしよう。

高レベルで相互認証されたカリキュラムと大学の独自性の両立がチューニングの魅力なのです。

チューニング・ジャパン始動！

チューニングの導入を目指し、本学では学内経費も用いて研究を続けてきました。2013年に2月と10月の2回にわたって国際シンポジウムを開催。3月には「Tuning USA」発足時にアドバイザーとして活躍したクリフォード・アデルマン教授を招聘、チューニング関連のセミナーとワークショップを開催しました。10月には、EUでチューニング事業の中心的役割を担っているローベルト・ワーヘナール教授（オランダ・フローニンゲン大学）を招いて講習会を開催しています。ほぼ同時期に、The European and Asia-Pacific Social Science Network*に参加した大学との間でカリキュラム開発と調査を進めることに合意しました。

アジアでも中国教育部、北京大学、清華大学との連携により協同基盤づくりを進めています。具体的には、流動化を支えるファンディング、大学ガバナンス、MOOCs (Massive Open Online Courses)、国際連携IRをテーマとする共同研究体制を整えています。なお、一橋大学大学院国際企業戦略研究科及び北京大学光華管理学院、ソウル大学校経営学部・経営専門大学院は、チューニングに基づくキャンパスアジア「BESTアライアンス」をすでに展開しています。

国内でも2013年11月に有力12大学が参加する教育改革推進懇話会のなかに、一橋大学を幹事校としてチューニングのワーキング・グループ[※]を設置。勉強会や研究会という形式で月1回の定期会合を開催。カリキュラム調整の枠組み構築の準備を進めています。

12月には、EUチューニング事業体より「Tuning Japan」のロゴを取得。こうして、チューニング・ジャパンが始動しました。



山内学長



落合副学長

一橋大学においてこのようなチューニングを推進する機能を持つ組織が、「森有礼高等教育国際流動化センター」なのです。4月には新センターのWEBサイトを開設。教授、助教、研究補助員、グローバルコーディネーター等が業務を開始しています。外国人教員の採用など、体制はさらに充実する予定です。

*ボンベウ・ファブラ大学、パリ政治学院、ブラハ経済大学、コペンハーゲンビジネススクール、コインブラ大学、ソウル大学校、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス、オーストラリア国立大学、オークランド大学、一橋大学
 ※北海道大学、東北大学、筑波大学、東京大学、早稲田大学、慶應義塾大学、東京工業大学、名古屋大学、京都大学、大阪大学、九州大学、一橋大学（幹事校）

チームジャパンとして高等教育を改革

チューニング・ジャパンの活動は、日本の高等教育改革の起爆剤になることでしよう。その中核となるのが、前述の教育改革推進懇話会に設置されたチューニング・ワーキング・グループです。シラバスづくり、留学単位の互換、共同学位の事例研究などの勉強から始め、12大学間でのチューニングの可能性も議論しています。

教育のグローバル化が進んでいる現在ですが、国内のリソースが十分活用されているとは言えません。各大学が単独で独自のグローバル展開を考えバラバラに方策を練っているというのが実情です。しかし、日本の大学が国際的に通用する高等教育機関たらんとするならば、多くの大学が同じ意識を持つことが必要であり、少なくとも同レベルの大学はヨコにつながってい

くべきではないか——こうした議論の必要性が認識されつつあります。

国内の主要12大学が、チューニング・ジャパンとして連携することは非常に重要なことです。ここで教育の質が相互保証されることで、世界中での教育機関と協定交渉をするときでも、「当大学の教育の質はチューニング・ジャパンが認証している」と自信を持って言えます。チューニング・ジャパンがそのようなステータスを確立すれば、世界の高等教育のなかで大きな存在感を示すことになるでしょう。

“世界が一橋大学”になる仕組み

大学の創設者・森有礼は、初代文部大臣として教育のイノベーションに力を注ぎました。新センターにその「森有礼」という名前を冠したことによって私たちの視野が広がり、チューニングを中心にやるべきことが次々に見えてきました。学内のセンターだから……と内向きになるのではなく、わが国の高等教育改革のエンジンのひとつにならなくてはいけないと自然に意識するようになってきたのです。

小規模で小回りのきく一橋大学にできることは何か。やはり、ネットワークの中心になることです。国内はもとより世界中にさまざまな教育研究ネットワークがありますが、その中に自らをきちんと位置づけていけば、世界が一橋大学になります。どんな大規模大学よりもスケールの大きな教育研究が可能になります。

2013年10月29日(火)にEUSI東京(田中Studies Institute in Tokyo)との共催で、一橋大学は「ヨーロッパ・アジア太平洋の社会科学ネットワーク国際シンポジウム」を開催しました。先述のように、このシンポジウムの目的はロンドン・スクール・オブ・エ

コノミクスをはじめとする世界の著名な10大学の間でのネットワーク形成にありました。各大学代表によるプレゼンテーションやパネルディスカッションを通じて、地域を越えた協力のあり



「ヨーロッパ・アジア太平洋の社会科学ネットワーク国際シンポジウム」パネルディスカッションの様子

て、地域を越えた協力のあり方を検討しました。そして、こうした国際シンポジウムや代表者会議を引き続き開催していくことで合意。今年はヨーロッパで会合を開催する方向で調整しています。こうした仕掛けを、本学はこれからもどんどん試みていきます。もうひとつ、本学の卒業生組織・如水会の世界ネットワークには他に類を見ない質と

高等教育の新しいパラダイム

「森有礼高等教育国際流動化センター」の専任スタッフは、外国人教員を含めて5〜6人です。しかし学内には、教育社会学、教育経済学、国際比較教育学などを研究している先生方がいます。こうした専門家から随時意見をもらえることは利点です。チューニングで先行しているEUからのアドバイスのひとつは、チューニングアカデミーをつくってはどうかということでした。つまり、チューニングに明るい人材を学内外で数多く育成することが重要だということです。今後、そうした活動も視野に入れていきたいと思っています。

山内学長は、平成30年の入学者から全学生を留学さ

せようと考えています。在学中の留学比率は、現在20%程度ですが、これを100%にしようという構想です。これは学生のみならず社会に大きなインパクトを与えることでしょう。必ず留学できるうえに大学の支援があつて負担も軽くなる。さらに、短期留学の後に長期留学に出るといったステップを踏むこともできる。しかも、相手大学とはチューニングで教育の質が相互保証されており単位互換も容易になります。

他方、一橋大学は、海外から教員を招いて英語でサマープログラムを展開するなどにより、国内外の学生に魅力的なプログラムを提供するようになるでしょう。世界の大学に向くばかりでなく、海外から学生を集め、居ながらにして国際的な環境をつくりだすことができるわけです。これは、互いのレベルを認証し合い尊重し合っているからこそ可能なのです。

これが、チューニングがもたらすグローバル教育の風景です。そこには、大学が個別完結性を求められていた今の日本の高等教育とは全く違ったパラダイムがあります。これまでは、それぞれの大学がいかに努力して、質を高めていくかという大学単位の教育改善が求められてきました。各大学は、それぞれ素晴らしい大学を単独で築き上げようと競争してきました。こうした競争に日本の大学は疲弊しています。今必要なことは、ヨーロッパの優れた大学群がすでに行っているように、チューニングに基づくヨコのつながりのネットワークを構築していくことではないでしょうか。

一橋大学は社会科学の研究総合大学として、その質が高く評価されています。だからこそ、国内外の優れた大学とリーグを組むことができるのです。チューニング・ジャパンをベースとしたチューニングにより世界中に散らばっている教育資源を結び付け、自分たちのために使えるようにすることで、世界が一橋大学になるのです。